

意欲ある学級の創造をめざして

—教育相談的考え方・手法を学級経営に取り入れてみて—

中
白根市立白根小学校教諭 大 屋 俊 英

I 主題設定の理由

本校生徒の毎日の生活をみるに、授業——クラブ——テレビ——宿題、の間を反復している単調な繰り返しの連続であるといえる。この反復運動を支えているものは「個人競争」であり、これらが共通してつくり出すものは「受身」の生活である。この「競争」と「受身」の生活から、生徒たちは「自分からやる意欲」をなくし、自分だけよければといった「よそよそしい人間関係」の中で、孤立化せざるを得ないのではなかろうか。この点については、研究対象学級もその例外ではなかった。

この喪失した「自主的な意欲」と「人間関係」を取り戻すために、学級成員相互の集団的エネルギーを利用しなければならないと考える。「個人競争で支えられたよそよそしい集団」から「みんなの励ましによって支えられた意欲ある集団」に変えていこうとする努力の中にこそ、生徒たちが自分の意欲を変革するエネルギーを発見するのではないか。すなわち、学級内に好ましい人間関係を育てることにより、また、教師の一言を心まちに隅で黙っている生徒との接触をくふうすることにより、みんなが伸び伸びと満足して生活し、それぞれの個性や能力をじゅうぶん発揮できる学級ができるのではないか。以上のようなことから本主題を設定した。

II 研究の方法ならびに経過

1 研究の仮設

消極的な、しかもよそよそしい人間関係のみえる学級内のグループ構成をくふうし、個人指導を深めれば、学習成績が向上し、ひいては性格変容をもたらすことができるのではなかろうか。

2 研究の方法

研究対象学級内のグループ構成をくふうし、適切な“班”を作り、適切な指導を加えたあとの変化を、次の点から比較検討する。

- (1) ソシオメトリック・マトリックスによる比較
- (2) 教研式、標準学力テストによる比較

3 研究対象学級とその概況

(1) 研究対象学級；— 昭和43年度 2年〇組

(2) 構成員；—

生徒数は男子20名、女子21名、計41名で、2年になるとき学級編成替えによって新編成された学級である。なお、この学年は昭和42年度市内3小学校（A小5クラス、B小2クラス、C小1クラス）から本校に入学してきたもので、男子142名、女子142名、計284名が、7クラスに編成されている。

(3)；知能；—

教研式新制学年別知能検査（S42・9・22実施）によると、知能偏差値65以上1名、40未満2名である。知能段階でみると2段階以下の生徒が比較的少なく、3の段階に多くの生徒が集中していることが目につく。この点、学級の指導によっては、学習面で相当の成果が期待できるのではないかと思う。（学級平均51・1）

知能段階	1	2	3	4	5
男	0	1	12	6	1
女	0	4	12	5	0
計	0	5	24	11	1

(4) 性格；—

YGT（S43・9実施）の結果からみると一目瞭然、消極的な学級であることがわかる。特に、男子に消極的なC型の多いこと、女子にE型・B型が並んでいることと、反面、理想的な人格の持ち主といわれるD型の少ないことなど、指導上多くの問題を含んでいると思う。

型	A	B	C	D	E
男	5	1	7	4	3
女	6	6	2	1	6
計	11	7	8	5	9

(5) 担任（報告者）のみた学級の状況；—

ア. 新編成のもと新学年がスタート。1カ月、2カ月……学級の中には、静かな陰にこもったふん囲気が流れている。とうとう「1年生の時のクラスがよかった。」という声まで女子からとび出してくる始末である。これは生徒・教師間、生徒相互のラポートが低く、相互理解が不十分であることからくるものと思われるし、また、消極的な生徒が多く集まっていることからくるものと思う。

イ. そのうち、学級での話し合いなどでは、男子の中で茶化したり、変な声を出して笑わせたり、いっこう話し合いがまとまらないといった現象まで出てきた。これは消極的で、まとまりのない学級にあって、学級の核となる生徒のいないためと思われる。それは、年度当初学級委員長に選ばれたB3、副委員長に選ばれたG24が、6月実施のソシオメトリック・テストの結果、それぞれ、B3は社会測定的階層がⅣ、社会測定的地位点が被排斥数0の9、G24は周辺生徒で、社会測定的地位点が被排斥数0の5であったことからわかる。なお、中学生段階のグループは遊び中心の場合が多く、B4を中心とする第2下位集団が上記のような言動をとっていた。また、リーダーの地位が低いのは、遊びのふん囲気の少なさから敬遠されている面がみられる。

ウ. 6月実施ソシオメトリック・テストの結果、女子9名の第1下位集団を最高に7つの下位集団と、周辺生徒・孤立生徒合わせて13名の多くを数えていることから、学級のまとまりをつく

るには相当の困難が予想される。

4 研究の経過

以上、研究対象学級の現状分析の結果、次の2点に力を入れて指導を行なった。

(1) 学級内の班編成の検討と再編成。

研究対象学級の“班”というのは、生活班的な要素と学習班的な要素をいっしょにしたもので、学級における活動の大部分が、この“班”を中心に行なわれる。

“班”は男子3名、女子3名、計6名で、学級は7班編成とする。“班”の編成替えは学期1回を原則とし、教室内での班長の座席は班の中央におく。などを生徒と約束の上編成する。

1学期の班編成は、学級生徒全員の互選で班長を選び、教師を交えた班長会議で班員を組織するという方法をとった。ところが、この民主的と思われた方法も思うようにはいかなかった。まず、班長互選の結果、教師の意図した生徒でなく、おとなしくリーダーには適さないとされる生徒が2、3選ばれたし、班員の構成にもかたよりが少しみられた。その結果、先に述べたような、まとものない非協力的な空気が学級内にみられるようになったのだと思う。

そこで、2学期の班編成にあたっては「学力の向上」を学級当面の目標とし、そのためには班員が協力しあい、助けあって学習していかなければならないことなどを生徒と話しあい、班長および班員の編成を担当に一任するということを約束した。そこで、班の構成を1学期5教科(国・社・数・理・英)の学習成績をもとに、男女とも学習成績上・中・下の生徒がはいるようにし、また、6月実施のソシオメトリック・テストの結果、相互排斥生徒・孤立生徒などの所属班を考慮して編成した。なお、その中にあって1学期5教科の学習成績上位者を原則として班長とした。

3学期の班編成も同様な方法で編成したが、この非民主的と思われた方法が、かえって、この研究対象学級においては良結果をもたらしたようである。すなわち、その第一は班長になった生徒に何とか班をまとめていかなければならないという自覚が出てきたことであり、それとともに班長を中心になんとかまとまろうとする意欲が出てきたことである。

(2) 生活ノートによる個人指導(教育相談)の徹底

本校では家庭学習の計画化・習慣化と、生徒の生活を理解するため「生活ノート」なるものを与え、1日の生活時間と豆日記を記入し、毎日提出させている。特に、豆日記とカードの裏面を利用し、その日の感想、先生に話したいこと、相談したいことなどを記入させている。

われわれ現場の教師は、教科指導・学級経営の他に、分掌事務、各種の会議と研修、クラブ指導にと、とにかく多忙である。特に中学校では、学級担任が自分の学級の生徒と共に過ごせる時間は少ない。日によっては学級の生徒に話しかけることはおろか、担任が学校に出動していながら「学級の生徒と顔を合わせる」ことがなかった。」という日も出てくる始末である。このような状態にあって「1日に1回以上は、先生に話しかけよう。」というねらいではじめられたのが本校の「生活ノート」である。それに対し、教師は必ず目をとおす。できたら感想、アドバイスなどを記入して返すことに心がけている。なお、教育相談については、「生活ノート」をもとに放課後などを利用して随時担任が実施しているし、全校一斉に学期1回定期相談日の特設している。

研究対象学級においては、「生活ノート」をとおして、家庭学習のあり方・家庭学習の時間など

を中心に指導を続けた。具体例は紙面の都合で省略する。

Ⅲ 研究の結果と考察

1 ソシオメトリック・マトリックスによる比較

表 1 (研究対象学級の社会測定的地位階層の変動)

社定位 会的階 測地層	下集 位団	生番 徒号	生番 徒号	下集 位団	社定位 会的階 測地層
I	1	G 2 1	G 3 8	1	I
		3 3	3 4		
		4 1	2 3		
		3 5	4 0		
		3 2	2 4		
		2 9	2 5		
		2 3	3 3		
		2 5	2 5		
		2 6	4 1		
II	2	B 4	2 9	2	II
		8	3 6		
		5	2 1		
		1 2	3 5		
		1 4	3 9		
		1 6	B 2		
III	3	G 2 8	1 5	3	III
		3 4	1 8		
	4	3 8	1 4		
		G 3 6	1 0		
IV	5	2 7	1 9	4	IV
		3 0	3		
	6	B 3	1 7		
		1 9	1 3		
V	周辺生徒	B 2	7	5	V
		1 8	B 8		
		G 3 1	5		
		4 0	4		
VI	孤立生徒	G 2 4	1 2	5	VI
		B 1 5	9		
		G 2 2	G 2 3		
		B 2 0	3 1		
		1 3	G 2 2		
		1 0	3 7		
		B 1	3 2		
		9	1 6		
		7	1 1		
		1 7	6		
		6	2 0		
		G 3 7	B 1		
		3 9	G 2 7		
			3 9		

研究対象学級において昭和43年6月
(第1回)と昭和44年3月(第2回)

にソシオメトリック・テストを実施した。
そのソシオメトリック・マトリックスに
よる集団変容の考察を行なってみた。

結論から先に言くと、まとまりのない、
てんでバラバラといった学級がまとまり
をみせ、よい傾向にあるといえる。

ア. 第1回、女子9名の下位集団を最高
に7の下位集団を数えた学級が、第2
回では女子14名の下位集団を最高に
5の下位集団となった。

・男子は、B4を中心に形成されてい
た第2下位集団にかわり、第5第6下
位集団を中心に周辺生徒を吸収して、
10名の第2下位集団を形成した。

・女子は、第1回の第1第3第4下位
集団がひとまとまりになり、14名と
いう大きな下位集団を形成した。

イ. 第1回の集団が遊び中心の集団であ
ったのに対し、第2回の集団は先に教
師が意図的に作りあげたリーダー(
1学期学習成績上位者)を中心にまと
まりつつあり、よい傾向にあるといえ
る。すなわち、表1の生徒番号を○で
囲んだ生徒を班長としたのであるが、
それぞれ地位が向上し、その下位集団
の中心となりつつある。

ウ. 周辺生徒・孤立生徒が少なくなり、それぞれの地位が向上している。反面、4名の生徒の地位
が下がっているし、依然としてB1・G39が孤立している。

エ. 表1には現われていないが、被排斥数の多かった生徒の第2回目の被排斥数が減っており、

(B10が13→3, B17が10→5, G37が13→7, G39が12→5)

逆に、B4の被排斥数が0→11と増している。これは学級概況のところに記したが、学級をかきまわすような言動が原因しているものと思われる。

2 教研式 標準学力テストによる比較

表2 (研究対象学級の教研式標準学力検査による学力の変動)

生徒 番号	知 能 偏 差 値	知 学 力 偏 差 値	1 年			2 年			学 力 比 偏 差 値	3 知 年 能 時 偏 差 実 施 値
			学 力 平 均 値	新 成 就 値	判 定	学 力 平 均 値	新 成 就 値	判 定		
B 3	66	61	57	- 4		68	7	○	11	62
17	64	60	68	8	○	65	5			64
9	62	58	58	0		65	7	○	7	60
G24	59	56	69	13	◎	73	17	◎		57
34	59	56	62	6		62	6			63
B20	59	56	55	- 1		54	- 2			63
15	58	56	73	17	◎	75	19	◎		63
G25	57	55	61	6		67	12	◎		56
B 5	57	55	57	2		56	1			57
G21	57	55	54	- 1		49	- 6			62
B19	56	54	61	7	○	52	- 2		- 9	50
G41	55	54	54	0		61	7	○	7	58
B12	53	52	58	6		54	2			56
1	53	52	56	4		57	5			51
14	53	52	51	- 1		58	6		7	56
11	52	51	63	12	◎	54	3		- 9	55
G38	52	51	59	8	○	66	15	◎	7	46
31	52	51	55	4		57	6			56
B16	52	51	49	- 2		53	2			48
G23	51	51	51	0		54	3			46
28	51	51	49	- 2		52	1			48
B18	51	51	49	- 2		48	- 3			49
G22	51	51	48	- 3		52	1			47
B 4	51	51	47	- 4		53	2			49
G36	51	51	42	- 9	×	46	- 5			/
26	49	49	59	10	◎	57	8	○		44
G 7	49	49	47	- 2		49	9			49
G33	48	49	49	0		48	- 1			45
B13	48	49	48	- 1		47	- 2			48
G40	48	49	42	- 7	×	52	3		10	52
39	47	48	42	- 6		48	0			54
B 2	46	47	64	17	◎	64	17	◎		54
G27	46	47	33	-14	※	37	-10	※		30
29	45	47	41	- 6		49	2		8	46
B 8	45	47	41	- 6		47	0			50
10	45	47	35	-12	※	48	1		13	37
G32	43	45	42	- 3		43	- 2			43
35	41	44	48	4		47	3			48
30	40	43	38	- 5		40	- 3			/
B 6	37	41	40	- 1		38	- 3			/
G37	36	40	36	- 4		41	1			35

研究対象学級生徒に教研式・標準学力検査(国・社・数・理・英)を1年時3月と2年時3月に実施したが、その学力偏差値、新成就値などを比較してみた。

ア. 先ず、学級全体についてみると、1年時新成就値、負の者が22名、-7以下の者が4名いたが、2年時は負の者が11名、-7以下の者が1名に減っている。

学力偏差値平均の学級平均が、1年時50.8であったのが、2年時53.8と、3点よくなっている。これらのことから徐々にではあるが学力が向上しているといえるのではないかと。

なお、学校における中間テスト、期末テストの成績においても2年2学期からの急速な向上が認められる。

イ. 意欲的にものごとに対処している生徒は、学級内における人間関係が安定し、学習成績も向上していき、人間関係の安定していない生徒は学習成績も低下していきといえるのではないかと。

(注)
※知能偏差値はS42・9実施の教研式学年別知能検査(1年)による。
※判定欄にはオーバー・アチーバー・新成就値7以上に○、10以上に◎、アンダー・アチーバー・新成就値-7以下に×、-10以下に※を付した。

以下、個々の生徒について2, 3の例を示してみる。

- 2学期はじめに班長とした生徒のマトリックスにおける地位が向上したということは前述のとおりだが、学力も向上しているということがB3, G38, B9などの成績の変動をみても、はっきりいえるのではないか。これは責任ある立場におかれた者の責任感とものごとに対する意欲からくるのではないだろうか。
- B10 第1回マトリックスでは周辺生徒。被排斥数13, 特に女生徒からの排斥多い。この生徒は小学校以来、病弱のため成績振わなく、性格も明るい方ではなかった。YGTの結果はE型。ところが、2年2学期中間テスト英語の点数がよかったのを契機に英語に対する興味を増し、急速に成績向上した。これは表2学力検査成績をみてもはっきりわかる。それとともに友人関係も安定し、第2回マトリックスでは地位が向上し、被排斥数も3に減った。なおG4.0も同じようなケースだが、ちょっとしたことから社会科に興味を示したのが、好結果をもたらしたようである。
- B11 成績低下した筆頭であるが、体格がよく腕力も強い。見栄っ張り。すなおさなく進んで仕事をしないなどのことから友人から嫌われてきた。第1回マトリックスでは第2下位集団にはいっていたが、第2回目では周辺生徒となる。この友人関係の不安定が学力検査の結果となってあらわれてきたようである。

IV 研究のまとめ

以上ささやかな実践ではあったが「グループ構成をくふうし、個人指導を深めれば、学習により影響をあたえ、学習成績も向上する。」ということについては、ある程度の効果が認められたと思う。その、学級全体の学習成績が向上しつつあるということが、学級内の人間関係にもよい結果をもたらし、学級としてことにあたらうとする意欲的な明るいふん囲気が出てきたことは、担任(報告者)にとってもうれしいことである。現在は3年〇組として担任・生徒ともに残り少なくなった中学生活の一日一日をたいせつに過ごしている。

人は集団の中で成長していくのである。いろいろな人とのかわりあいの中で、変化し成長していくのである。しかし、教育の現場の最前線にある学級担任は、学級全体の指導に意を配るとともに、学級のひとりひとりの生徒の内面的な問題を理解してやろうとする“教育相談的考え方”を生かすような心がけて毎日の教育に精進すべきであると考える。